日本小児看護学会　第27回学術集会ご案内

学術集会テーマ：子どもたちの笑顔は　私たちのたからもの

【会　　期】2017年8月19日（土）～20日（日）
【会　　場】国立京都国際会館
【演題募集期間】2017年1月10日（火）～2月17日（金）正午
【参 加 費 用】会　員（事前）：10,000円、会　員（当日）：12,000円 ／ 非会員（事前）：12,000円、非会員（当日）：14,000円
【プログラム（1日目）】
会長講演：「子どもたちの笑顔は　私たちの宝物（仮）」
小城　智圭子（京都府立医科大学附属病院　副病院長兼看護部長）
特別講演：「小児難病疾患解明・臨床応用開発に向けたiPS細胞研究の展開」
平家　俊男先生（京都大学　発達小児科学　教授）
テーマセッション、一般演題（口演・示説）、総会、懇親会　他
【プログラム（2日目）】
教育講演：「Children　First！子どもたちが教えてくれる未来の医療と社会」
細井　創（京都府立医科大学　小児科学教室　教授）
シンポジウム：「子どもたちを笑顔にするわざ」
松田　弘子（静岡県立こども病院　看護師長）他
テーマセッション、一般演題（口演・示説）他
【第27回学術集会 URL】http://www.jschn27.jp　から画面表示に従って登録してください。
【事　務　局】＜学術集会事務局＞ 京都府立医科大学
〒602-8566　京都市上京区河原町広小路上ル梶井町465　E-mail：jschn27@koto.kpu-m.ac.jp
＜運営担当：演題登録・事前参加・学会運営に関するお問い合わせ＞
株式会社プロコムインターナショナル
〒135-0063　東京都江東区有明3-6-11　TFTビル東館9階　E-mail：jschn27@procomu.jp

2016年度日本小児看護学会 地方会（北海道地区）開催のご案内

札幌市立大学看護学部　松浦　和代

2016年度日本小児看護学会地方会（北海道地区）を、2017年2月18日（土）13:00～17:00、札幌市立大学桑園キャンパスにおいて開催いたします。テーマは「小児看護の知を国際支援へ」としました。主なプログラムは、会長講演・シンポジウム・交流集会です。会長講演のテーマは「モンゴル国における先天性股関節脱臼予防ケアの実践」、シンポジウムのテーマは「小児看護の知を国際支援へ」とし、国際支援の実践者および被支援国からの招聘者を交え、日本の小児看護の知を国際支援へとつなぐ取組みについてご紹介を致します。また、交流集会では、広域医療圏北海道における小児救急認定看護師の活動、新生児集中ケア認定看護師の活動、小児専門看護師の活動、病院内子ども虐待対応組織の活動を取りあげます。参加費は、会員無料、非会員1000円です。

本地方会の翌2月19日（日）から、第8回アジア冬季競技大会（札幌市）が開催されますので、宿泊される方は早めに予約をお取り下さい。

寒さの厳しい季節ではございますが、北海道の最も美しい季節でもあります。活気ある地方会としたいと考えておりますので、皆様のご参加を心よりお待ち申し上げております。

理事会からのお知らせ

日本小児看護学会第26回学術集会開催時に、日本小児看護学会研究奨励賞授与式が執り行われました。

研究奨励賞受賞論文

2015年度日本小児看護学会研究奨励賞論文選考の結果、下記1編を受賞論文と決定しました。

杉山智江（2014）：小児がんの子どもがターミナル期に病気の予後や死の不安・恐怖を「語り」始めた瞬間からの看護師の関わりのプロセス、日本小児看護学会誌23（2）,1-9.

広報委員会からのお知らせ

2012年4月に運用を開始した会員専用SNSは、新規加入者、アクセス数の伸び悩みが認められたことから（関連記事をニュースレター第48号に掲載）、現在のシステムを今年12月で終了することになりました。これにかかわる方法として、会員へのメールマガジン配信を始めることになります。主には学会ホームページに新しい情報が掲載された時のお知らせを、入会申込時の登録、またはその後更新のあったE-mailアドレスに送信させていただく予定です。詳しくは、12月頃、学会ホームページにてご案内しますのでご確認ください。

◆ 編 集 後 記 ◆

日本小児看護学会ニュースレター49号をお届けします。学術集会や委員会活動、会員に関する情報を掲載しております。お忙しい中、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。また、今回は広報委員会企画で「医療現場からのレポート」の記事を掲載しております。看護実践で直面する課題や話題をご紹介し、会員の皆さんと共有する機会になれば幸いです。

広報委員会メンバー
委員長：奈良間美保
委　員：上原章江、竹内幸江
新家一輝、堀　妙子
丸　光惠

2016年11月　第49号

一般社団法人 日本小児看護学会
Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会 第26回学術集会を終えて

学術集会会長　高野 政子
（大分県立看護科学大学看護学部）

第26回学術集会は平成28年7月23日（土）、24日（日）に、大分県別府市にある別府国際コンベンションセンタービーコンプラザにて、「つなぎ　活かす　小児看護の現在（いま）と未来-Linkage, Coordination and Development-」のテーマで開催しました。九州では12年ぶりの学術集会の開催でした。開催前の4月には震度7の熊本・大分地震が発生し、会員の皆様には開催までご心配をおかけしました。当日には熊本からもご苦労の中、研究発表等にご参加くださいました。被災した皆様にお見舞いを申し上げますとともに、一日も早い復興を祈念しております。

このような状況の地方開催にも関わらず1481人という多くの参加者が集い盛会裏に終了できました。心より御礼を申し上げます。学術集会事務局には、九州・沖縄地区の正会員数が極めて少ないという課題がありました。そこで、まず全国の看護職養成校や小児専門病院の他、訪問看護ステーションなどに、ポスターを配布しました。終えてみると、学会参加者は会員と非会員がほぼ半数ずつで、会員数も少し増えました。本学会を知らない方々に学会を知ってもらえることに、地方で開催する意義があると思いました。

会長講演では、少子超高齢社会における小児在宅医療政策に対応するための小児看護に携わる看護職の課題と、患者や家族のニーズの多様化に対応できる高度実践看護者として大学院教育において診療看護師（ナースプラクティショナー：NP）の養成に取り組んでおりますので、その教育と修了生の活動をご紹介しました。

特別講演は、米国ワシントンD.CにあるChildren's National Medical Centerで小児ＮＰとして活躍されている美智子・レンデンマン氏を招聘し、米国のCNSとNPの役割と責務及び実際の活動の違いや課題について、ご講演いただきました。日本における小児の診療看護師（NP）の誕生から生じるCNSとの協働では、看護の根幹は同じであると示唆に富むものでした。また、教育講演では国立病院機構南福岡病院名誉院長の西間三馨氏に、子どもの食物アレルギー対策と健康支援について、これまでの研究成果にユーモアを交えてのご講演で、知見に富むものでした。

シンポジウムでは、小児在宅医療の現状と関わる看護職への期待について、日本看護協会会長の坂本すが氏から、重症心身障害児者の現状については医師の佐藤圭右氏、急性期病院からの地域への橋渡しを実践については小児専門看護師の品川陽子氏、重症心身障害児者の訪問看護を目指す診療看護師（NP）の後藤愛氏、在宅療養児を支援している訪問看護ステーションの管理者である中本さおり氏からお話をして頂きました。子どもが住む地域による医療格差のない社会をめざし、安全で安心な医療の提供を保障する上で、看護職はいかに協働し子どもと家族の健康や生活を支えていくかという問いについて討論し、共有できました。

一般演題は、208演題（口演:80題、示説:128題）と過去最高でした。また、テーマセッションは公募で17演題とエキスパートパネル2演題と理事会推薦の1演題となりました。どの演題も小児看護に関連する重要なテーマでしたので、参加者が困るほど多岐にわたるものだったと思います。看護実践のさまざまな取り組みを共有する機会となりました。また、小児看護の基礎教育や継続教育については、胎児診断や復職看護師の再教育など新しい視点も討論されました。

ランチパフォーマンスでは親の会からの発信と、共催セミナー2演題は、製薬会社による企画を開催しました。一つは昨年に続き「てんかん」に関するセミナーと、新規の「子どもの痛み」に関するセミナーで、どちらも広い会場を準備しましたが立ち見が出るほどに大盛況でした。

学術集会の運営につきましては、九州・沖縄地区小児看護教育研究会参加校の教員や実習施設の看護部長にご推薦いただいた方々に企画委員を務めて頂きました。また、学術集会当日の実行委員は地区全県の大学教員、大分県看護協会と県内の医療機関の皆様、大分県立看護科学大学の教員や、卒業生、在学生などに多大なご尽力を賜りました。無事に終了することができただけでなく、学会終了後には参加者から温泉も楽しめたことなど満足の声も届き安堵しました。第26回学術集会は、九州・沖縄地区のチームワークで乗り切ることができました。重ねて全ての皆様に深謝申し上げます。

▼企画委員の皆さん

▲特別講演のレンデンマン・美智子氏

日本小児看護学会第26回学術集会に参加して

■ 藤井 智恵子（別府発達医療センター）

私は、重症心身障害児施設（医療型障害児入所施設）に勤務しております。これまで、日本小児看護学会における研究対象とするのは、一般の小児科疾患や、重症度の高い症例や、病院での先進医療の中の看護が主であると思っていました。企画委員を務めることになり、第25回学術集会に参加し、そのイメージは一新しました。発表の対象も、研究の視点も、参加者の置かれている立場も多種多様で、障がい児や支援学校や、在宅の発表も多く、とても感動して帰ってまいりました。

そして、今年度、第26回学術集会では、企画委員として参加させていただきました。そこでは、現場で働く看護師だけでなく、日頃一緒に仕事をすることのない、九州各県の教育現場の方々と、企画・運営に携わる機会をいただきました。　今、振り返って、一言でいえば、「楽しかった!」。

看護教育の第一線にいる方々から、論文の読み方、指導の仕方を学び、看護を「学問」として捉える考え方に新鮮さを感じました。そして、教育現場の課題なども、何気ない会話の中に聞くことができました。

学生は、いずれ現場の新人職員になる。人材育成に切れ目があっては、人はうまく育たない。教育現場と臨床現場が、ひとつの線上で私たちの後輩を育てていくことが必要だと感じました。そして、臨床の課題を、教育・研究機関と共有し、研究につなげ、その成果を患者に環元、反映し、より質の高い看護の実践に結び付けていけたらと思いました。

今後も、学術集会を通じ、教育機関と臨床現場がより協力し、連携を取っていけたらと思います。これからを生きる子どもたちのために。

「リレートーク」日沼千尋さん

自己紹介

北海道函館市で生まれ育ちました。父親は青函連絡船の船員でしたので、今でいう父親の職場見学?で、時々貨物船にもぐりこんで遊びました。母方の実家は漁師でしたので、やはりイカ釣り漁船に乗り込んだり、スルメや昆布の山を崩して叱られたり、網に潜り込んで絡まって出てこられなくなったり相当なおてんば娘でした。

大学は、看護を学べる最も近い大学ということで、弘前大学に入学しました。ここで、吉武香代子先生にみっちりご指導いただく幸運に出会いました。

看護師になったきっかけ

看護師は、当時女性として自立できる職業は限られていましたから、その中で最も関心をもっていた、人の生きざまに寄り添う仕事として選びました。

新人時代の思い出

大学を卒業して1年目は函館の市立病院の小児病棟に就職しました。救急指定病院で、あらゆる疾病、外傷、低出生体重児から思春期まであらゆる年齢の子ども達がいました。当時病院には新生児用の人工呼吸器が1台しかなく、一晩中酸素のバッグを押して換気を続け、眼下に広がる函館の夜景が白々と明けていき、一晩命をつないだ安堵感でいっぱいだったことを忘れられません。冬は夕方になるとスキーで骨折した子どもが何人も運び込まれ、直達牽引のためのフレームを組み立てるのに四苦八苦しました。1年のみ勤務した病棟ですがたくさんの思い出があり、新人であろうとなかろうと、すべての力を出し切らなければならない環境は、私を大きく育ててくれました。

小児看護の魅力

もっと小児看護をしっかりできるようになりたいと、国立小児病院（現在の成育医療研究センター）の乳幼児の外科系病棟に就職しました。ここでは専門的で先駆的な治療が行われている一方、看護の経験は蓄積しておらず、先天性疾患をもつ子どもたちがどのように育っていくのか、先を見通せないまま手探りで看護をする感じでした。結果的に旺盛な回復力で私たちの予想をはるかに超えてしっかりと育ち、社会に適応していく姿に驚き感動する毎日でした。一方で危機的な状況にある子どもたちもいて、無力感を感じることもありました。

日沼先生

何人もの命を預かる夜勤は本当に緊張し、一晩中おむつを替えて、一晩中哺乳をして、点滴を作っていた思い出があります。そんな中でも、消灯前に子どもたちのベッドを病室の入り口に引っ張ってきて、真ん中の廊下でみんなにおやすみ前の約束の絵本を読んであげることは、私の楽しみでした。それができた夜は不思議とみんな静かに寝てくれました。現在のように入院期間が短くなると、そんなひと時を持つことはないのでしょう。「子どもとともに育つ」やりがいのある仕事だと、月並みですが思っています。

ストレス解消法

鮮度の良いお魚や野菜を仕入れてきて、さまざま料理するのが好きです。この魚はこうして、あの野菜はこうしてと考えながら黙々と作ります。テーブルの上にたくさん並べて満足。食べてくれる人の都合にかかわらず、どんどん作ってしまい、自分でずっと同じ物を食べる羽目になっています。

後輩達に期待すること

最近の看護の現場は、専門分化し、難しくなったと感じています。それでも、小児看護の本質は、子どもの命を守り、成長・発達、生活の輝きを探求する活動であることは古今東西変わらないと思います。小児看護には、知識技術はもちろん、情熱と感性も大切ですが、経験が子どもたちの安全を守ると考えます。自分たちの看護と存在に確信をもって、さまざまな形で柔軟に続けていただきたいと思います。

バトンを受けて欲しい人 及川郁子さん

委員会活動紹介　国際交流委員会　カナダバンクーバーでの国際学会に参加して

委員長：中村由美子　委員：薬師神裕子、宗村弥生、平田美佳

国際交流委員会では、2016年8月17日（水）から22日（月）までバンクーバー・コンベンションセンター（カナダ、バンクーバー）において開かれた第28回国際小児科学会（28th International Congress of Pediatrics）への参加と、それに伴い小児病院（BC Children's Hospital）への見学ツアーを企画し、4名の学会メンバーで参加しました。

8月のバンクーバーは過ごしやすく、発祥の地であるガスタウンの石畳の道路や世界で唯一の蒸気時計台の音色などレトロな雰囲気を楽しむことができました。

バンクーバー小児病院は、バンクーバーが位置するブリティッシュコロンビア州の中心的な病院であり、看護師への小児看護教育もここが中心として行っています。Family Centered Careとして家族の重要性を掲げ、医療チームのパートナーとして家族の重要性をあげています。看護師教育として80ものワークショップが行われるなど、看護師の専門性、教育の高さが伺えました。

国際小児科学会は、小児科領域における医療者の最新の知見やコミュニケーションを目的として行われる国際会議です。その特徴として、参加者が研究内容を発表する他に様々なワークショップが開かれ、研究内容ばかりではなく子どもの睡眠や患者教育などのトピックスについても情報交換が行われていました。ポスター会場では、参加したメンバーの隣で知人であるアメリカの友人のポスターがあり、久しぶりの再会で交流が深められたなどのハプニングもありました。日本から参加し、発表した他の学会メンバーとの親睦を深めることもでき、国内の学会とは雰囲気も異なり、学会は終始リラックスしたフランクな雰囲気で行われていました。今回の見学ツアーや会議に参加して得られた経験は、今後自分の看護を深めていく上で大きく役立つものと期待されます。皆様も、是非一度国際学会に参加してみてください。

バンクーバーのダウンタウン。左の白い屋根の建物がバンクーバー・コンベンションセンター

医療現場からのレポート

広報委員　上原 章江

今回、広報委員会企画で、医療現場からのレポートを掲載することになりました。
看護実践の場で起きていることについて、皆様と共有する機会になればと思います。

静岡県伊東市にある伊東市民病院は、2001年に国立伊東温泉病院を引き継いだときに小児科を新設しました。山を越えなければ入院できなかった子ども達のため、小児科の統廃合が進んでいた時期には珍しい新設でした。当時働いていた看護師は小児看護の経験がほとんどなく、子どもや家族とのかかわりを通し、日々勉強させてもらいながら、今に至っていると思います。そんな私たちの、子どもや家族とのかかわりについてご紹介したいと思います。

大人との混合病棟

当院では、急性胃腸炎や呼吸器疾患など軽症な子どもの入院が多くなっています。成人内科病棟に数人入るだけであり、子どもたちが過ごしやすい環境はなかなか作られていません。それでも、子どもが使う吸入器に手作りで動物の飾り付けをしたり、子ども部屋のカーテンだけキャラクターに替えています。また、ゆっくりお母さんたちと話せるように、検温の順番を最後にする看護師もいます。ささやかな工夫ばかりですが、ご高齢の患者さんたちに「可愛いね」と言われる子ども達を、「そうでしょう」と一緒に笑いながら、子どもとご家族の笑顔を励みに頑張っています。

手作りの飾りつけ

ナースステーションの子どもスペース

「小児看護」チーム

院内継続教育の一環として、5年目以上の看護師が自分の関心のある領域でチームをつくり活動しています。その中の「小児看護」チームでは、小児看護の経験が少なくても子どもや家族の理解に努め、自分たちの看護につなげられるよう、2ヶ月に1回の集まりを通して活動を行っています。処置技術に不安をもつスタッフが多いですが、看護技術のマニュアル化をすすめるだけでなく、現代の家族特性をもとに、子どもや家族の思いをとらえられるようにしています。また地域への発信も行っており、昨年は『脱水への対処』をテーマに一般市民への啓蒙活動も行いました。

看護公開講座

地域・外来・HCU・病棟との連携

院内では、上述の「小児看護」チームのメンバー間で入院した子どもたちの情報交換をしています。外来・HCU・病棟と治療環境が変わることで、子どもや家族に対する看護師のとらえ方が異なることがあります。子どもや家族にとっては変わらない、ありのままの姿かもしれませんが、一時的なかかわりの中ではそのとらえ方を看護師が難しく感じてしまうこともあります。部署が異なる看護師間で情報を共有し、「あのときのお母さんの反応ってそういうことだったのだ」という新たな気づきがあったときは、みんなでなんとなく温かな気持ちになれています。

また、小さな地域なので、行政・福祉・教育の他職種とはいつも同じ顔ばかり…、というような連携ができています。医療面で頼られることが多いため、学会などの新たな情報を常に意識して、地域に生かせる努力が必要であると感じています。

そして小児専門病院から救急車で2時間近くかかる当院にも、医療を必要としながら家庭で生活する子どもたちがかかりつけとして通っています。同じような医療処置でも、紹介元病院によって指導内容が異なるため、子どもや家族の生活を病病連携を通して共有し、地域の中で成長発達する子ども達のお手伝いができるように心がけています。